知求会ニュース

2019年5月　　第70号

◎　博士課程、　入学おめでとうございます！

今春宇都宮大学大学院 国際学研究科博士課程国際学専攻に入学した Stanislaus ACQUAH さん、**TON NU THANH TU** さん(国際文化研究専攻・第19期生)、**三浦美恵子**さん進学おめでとうございます。今後の研究成果に期待したいと思います。（博士録49を参照）

◎　修士課程、入学おめでとうございます！

2019(平成31)年4月4日(木曜日)午後2時00分から峰キャンパス5B21教室にて、2019年度地域創生科学研究科修士課程のオリエンテーションが開催され、午後3時00分から国際系プログラムのオリエンテーションが開催されました。

今回の入学者は、地域創生科学研究科社会デザイン科学専攻グローバル・エリアスタディーズプログラムの第1期生13名でした。同専攻多文化共生学プログラムの第1期の20名でした。計33名でした。

学長からの新入生へのメッセージは宇都宮大学 HP （アドレスは以下参照)に、掲載されています。（http:// https://www.utsunomiya-u.ac.jp/important/007599.php）

◎　着任教職員紹介その24

アミン ガデミ助教

国際学科所属のガデミ先生が､ライマン先生の後任として4月1日付で着任されました。

①氏名（英文表記）：アミン ガデミ *(Amin GHADEMI)*

②専門：近代日本史・グローバル思想史

③前職：ハーバード大学博士課程

④趣味：読書、執筆、共同体の絆を強める地域活動

⑤自己紹介：

はじめまして。アミン・ガデミと申します。元々神戸出身の 3 世在日外国人ですが、日本史や東洋哲学の深い意義を海外の大学にいってから初めて感じることになりました。日本の過去を通して、現代まで未回答のままに残っている根本的な課題を検討することは、私の大学でのミッションです。

「知識」とは何か、「存在」とは何か、「グローバル化」とは何か、などといった問題を、過去の人がどのように捉えていたかを学生たちとともに探っていきたいです。どうぞよろしくお願いいたします。

（2019年 4月22日原稿受理）

槙野 佳奈子助教

国際学科所属の槙野先生が、田口先生の後任として 4 月 1 日付で着任されました。

①氏名（英文表記）：槙野佳奈子（*MAKINO Kanako*）

②専門：19 世紀フランス文学・思想

③前職：日本学術振興会特別研究員 PD

④趣味：美術館めぐり

⑤自己紹介：

みなさま、こんにちは。槙野佳奈子と申します。私は茨城県出身で、宇都宮は幼いころから家族でよく訪れていた街でした。そんな私が今回、宇都宮大学で教える機会に恵まれましたことを嬉しく思います。私の専門は 19 世紀フランスの文学・思想です。私は 5 年間フランスの大学で研究しており、現地で提出した博士論文では、1839 年にフランスで公式発表された写真技術が、当時の社会の中でどのように受け入れられていったのかを論じました。現在では、19 世紀フランスにおける「科学」と「非科学」の関係性について、新たな研究を進めています。国際学部では様々なことを学べる環境が整っていると感じています。その一員として力を尽くせれば幸いに存じます。どうぞよろしくお願いいたします。

（2019 年 4 月 8 日原稿受理）

◎ 掲載記事紹介

1．UUnow 第 48 号（平成 31 年 4 月 20 発行）12-13 頁に、「研究 keyword」コーナーで「あきらめなければ、道は拓ける！―スポーツ世界を対象とした研究―」の標題で中村祐司先生の記事が掲載されました。

◎ 国際学部だより

1．月刊福祉 4 月号（平成 31 年 4 月 1 発行）94-95 頁に、「第 48 回　各国からの風（最終回）」コーナーで「アドボカシーから子どもの権利の実現をめざす」の標題で特定非営利活動法人 ACE（エース）事務局次長成田由香子さん（国際学部国際社会学科 2 期生）の記事が掲載されました。

2．UUnow 第 48 号（平成 31 年 4 月 20 発行）10 頁に、「Welcome to 授業」コーナーで「国際学部 国際政治論」の標題で松村史紀先生と稲川星さん（国際学科 2 年）・本多芙未さん（国際学科 1 年）・遅宸琳さん（国際学科 1 年）・菊池蓮さん（国際学科 1 年）さんらの記事が掲載されました。

○ 刊行案内

1．国際学部と国際学部附属多文化公共圏センターより3月下旬に、多文化公共圏センター年報第11号139頁が刊行されました。目次を以下に記します。（敬称略）

はじめに　　多文化公共圏センター センター長　田巻松雄

特集Ⅰ　改組2年目の国際学部

1　新規開講科目を振り返る

「グローバル・イシュー研究演習Ⅰ・Ⅱ」（重田康博）

「グローカル・イシュー研究演習Ⅰ・Ⅱ」（田巻松雄）

「グローバル実践力基礎演習Ⅰ・Ⅱ」（清水奈名子）

「海外フィールドワーク演習Ⅰ・Ⅱ」（栗原俊輔）

2　外国語能力特別プログラム

「初習外国語能力強化プログラム」（松金公正）

「学術英語能力強化プログラム」（湯澤伸夫）

特集Ⅱ　『多文化共生をどう捉えるか』の刊行

編者による座談会（田巻松雄・出羽尚・立花有希）

書評（大山香、駒井洋、石川朝子、加藤佳代）

Ⅰ　投稿論文

「方法としての有島武郎（２）

―『小さき者へ』をめぐる東アジア知識人の知的共鳴と思想的連帯―」　丁 貴連

「越境を生きる中国朝鮮族の若者達＊―留守児童生徒から外国人若者へ―」　金 英花

“Multicultural Societies and Linguistic Research”　佐々木一隆

「ドイツの学校における宗教的多元性への対応」　立花有希

「日本語における二字漢語とその誤用に関して

―『関心』の指導法も含めて―」　方 小贇

Ⅱ　活動報告

1　第 10 回グローバル教育セミナー「水問題とグローバル教育」

2　＜シンポジウム＞国際交流都市日光の再発見

3　「福島原発震災に関する研究フォーラム」2018 年度の活動報告

4　入管法改正を機によりよい多文化共生社会を考えるシンポジウム

5　ニュースレター『HANDS next』第 24 号

6　キャリア報告 Reflections on International Communication and Career Seminars

（Andrew Reimann）

Ⅲ　関連資料

1　組織・活動報告

2　宇都宮大学国際学部附属多文化公共圏センター年報発行要綱

＊『HANDS next―とちぎ多文化共生教育通信』のお知らせ

2007 年 9 月 20 日に、ニュースレター『HANDS』第 1 号が発行されました。2010 年度より宇都宮大学特定重点推進研究グループ通信『HANDS』がリニューアルされ、『HANDS next』として再出発することになりました。

第 24 号(2019 年 2 月 28 日)

外国人児童生徒教育推進協議会報告

国際学部附属多文化公共圏センター

センター長（HANDS 部門代表）　田巻松雄

「日本語教室点描」

真岡市立真岡東小学校 日本語教室担当　佐藤和之

多言語進学ガイダンスに思う

国際学部客員准教授　若林秀樹

S さんとの出会いと支援の難しさ

国際学部 2 年　北川 瑛・齊田 雛

AMAUTA に参加して

国際学部 2 年　堀越桃奈

イヤーエンドパーティーに参加して

国際学部 3 年　韮澤怜子

イヤーエンドパーティー2018

農学部 2 年　小森真美

平成 30 年度子ども国際理解サマースクール報告

国際学部附属多文化公共圏センター　金 英花

サマースクールを振り返って

国際学部 2 年　駒形麻朋実

サマースクール（中国編）に参加して

国際学部 2 年　細谷美咲

サマースクールの感想文

国際学部研究生　丁 瑶

中国クイズの内容

国際学部 2 年　吉田竜聖

子ども国際理解講座～世界との出会い

国際学部 2 年　グエン ティ バン

事務局だより

―平成 30 年度の活動―

研究室訪問 50 第 9 号から国際学研究科に関係する内外の先生方に寄稿をお願いしたコーナーを設けました。

「平和と正義のパラドックスをこえて」

国際学部　**藤井 広重**

There are these two young fish swimming along and they happen to meet an older fish swimming the other way, who nods at them and says “Morning, boys. How’s the water?” And the two young fish swim on for a bit, and then eventually one of them looks over at the other and goes “What the hell is water?”

この一節は、アメリカ人の作家 David Foster Wallace（1962～2008）が 2005 年に Kenyon 大学卒業式にて行ったスピーチの導入部分です。同氏は、「このおサカナの小ばなしの肝心かなめのポイントは、あまりにもわかりきっていてごくありきたりの一番大切な現実というものは、得てして目で見ることも、口で語ることも、至難の業であるということ」だと述べます。同氏のスピーチについては日本でも翻訳され、出版されていますので（阿部重夫(訳)『これは水です』田畑書店 2018 年）、興味を持たれた方はぜひ手にとっていただきたいのですが、私が研究対象としている人権や正義（justice）も得てしてもっとも見えづらく、そして、考えにくいとも言えます。なぜなら、宇都宮大学で学ぶ学生や卒業生のように一般的な教育を受けてきた人々にとって、人権や正義は、“既に”そこにあるものだと考えられているからです。

私達は、人権を根拠に主張して他人の権利を侵害しても、また、正義を振りかざして誰かの命を奪っても、それを是として受け入れることがあります。繰り返しになりますが、一般教養を身に着けていると“自負する私達”にとっては、権利や正義がすでに当たり前のように存在している（受け入れられている）社会において、それらを行使することは、まるで正当な権威によって担保されているかのように感じることがあります。私達の当たり前は、時に冒頭の若い魚にとっての「水」なのです。

私は企業、NGO、国際機関、そして、内閣府といった様々な組織で職務経験を積む機会を頂いてきました。そもそも実定法の解釈を中心に国際法学を修めるのであれば、実務経験はそれほど重要ではありません。私のこれまでの実務経験も、国際法学者としては一見遠回りしているように見えます。今でこそ学生指導の際、私は実務を経験しておいて本当によかったと感じていますが、以前は同世代の研究者と比較して、自分が無駄な時間を過ごしているのではないかと自問自答した日々もあります。おそらく優秀な研究者は、一見すれば当たり前とされる事柄であろうと、時に何かしらの違和感を覚え、それを分析、批判することができるでしょう。でも、当時の私は人権や正義と向かい合うにあたって、実務の現場で人々の声に接したり、声なき声を拾うことでしか、この世界の当たり前とされていることに違和感を覚えたり、人権や正義について再考したりすることができなかったのです。これは学者としてはかっこ悪い告白ですが、学術研究に限らず、そもそも自分にとっての「水」に気がつくことは、とても大変な作業だと思います。

私の研究領域である平和構築と国際刑事司法において「平和と正義のどちらを選ぶのか（Peace versus Justice)」といった代表的な問いがあります。紛争下において重大な人権侵害行為に関与した組織のリーダー（時に政府）がいたとして、正義を選ぶとしたら当然に紛争に関与したリーダー達を司法によって裁かなければならないが、リーダー達を裁こ

うとすると、これに抵抗するためいつまでも紛争が終わらず和解ができない。もしくは、紛争下では、ほとんどといってよいほどに紛争当事者は何らかの重大犯罪に関与しているため、当事者たちすべてを法に則って裁けば、次の国造りの担い手までも訴追してしまう、つまり、その国から（例え犯罪に関与していようとも）リーダーの資質を持った有能な人材が誰もいなくなってしまう。そんな両立できそうもない平和と正義のジレンマを端的に示した問いです。私達にとっては、悪いことをしたら法に従って罰を受けるべきだとの主張も当たり前であり、誰もが安心して紛争のない生活を送ることができる状況を作ることもまた当たり前であるのです。当たり前に正しいと受け入れられている（と思われる）価値観同士が成立しないような状況もあるのが、この広い世界の一側面であり、私が自身の研究において突き詰めたいイシューなのです。

さて、私自身の研究に対する向き合い方について書き連ねてきましたが、本学に2017年10月着任以降、学生指導にも力を入れてきました。2018年4月には学生と国際平和と司法研究会（Utsunomiya International Peace and Justice：UIPJ）を立ち上げ、顧問を務めています。これまでの活動は、ぜひ学生によるHP(https://profile.ameba.jp/ameba/uipj)をご覧いただきたいのですが、一生懸命に研究？（まだ勉強？）に打ち込んできたので、2019年5月にグローバル・ガバナンス学会にて同研究会の学生がポスター発表の機会を頂けそうです。おそらく、本稿が公開される頃には発表も終わっているかと思いますが、どうか、主体的に学術研究に取り組み国内で頑張る学生たちも応援してあげてください。（ちなみに学生がポスター発表をしている隣で、私も研究報告をすることになっています。指導学生に幻滅されないように、自身の研究にも一層精進してまいります。）また、藤井広重研究室(https://www.fujiih.com/)では本年度から国際人道法の模擬裁判国内予選に参加します。優勝すれば、日本代表としてアジア大会にも出場できる世界規模の大会です。私もライデン大学在学時に挑戦したことがあります。準備は本当に大変ですが、チームは世界1位となり、とても思い出深い（でも実は、個人的にはとても悔しい）経験です。

自身の研究成果を還元しながら学生と一喜一憂できるこれらの機会にも感謝し、この世界の「あまりにもわかりきっていてごくありきたりの一番大切な現実」とこれからも学問を通して向かい合っていきたいと思います。興味のある方は研究室にご訪問ください！

（2019年3月13日原稿受理）

博士録48 第22号から今後の博士誕生を鑑み、新コーナーを設けました。

「台湾の介護分野における外国人労働者受け入れに関する問題
～労働者の労働・生活・行動と失踪問題の視点を軸に～」

鄭 安君

博士論文要旨

1992 年より正式に外国人労働者を受け入れてきた台湾は、先行国の経験を「教訓」

にし、「経済利益最大化」および「社会コスト最小化」の実現を目指すために、より「厳格な管理」を行った。雇用主側は申請基準に達しないと外国人労働者を受け入れることができない一方、外国人労働者側は職種・職場の変更が厳しく制限されている。

こうした「厳格な管理」は、外国人労働者を補助的かつ短期的な労働力として受け入れて、その人数を一定規模内に抑制すると同時に、労働者の失踪および「不法就労」をも防止する方策として行われてきた。しかし、現実では、今日の台湾は 25 万人にも上る外国人介護労働者を受け入れている。そして、近年、年間 2 万人前後の外国人労働者が失踪している中で、介護労働者の失踪が目立っている。

先行研究の大半が、外国人介護労働者の労働条件や人権侵害または失踪問題について、雇用主・仲介業者・労働者の間にある社会的強者と弱者の関係性を軸に分析してきた。それに対して、本論は、失踪者（失踪経験者）を含む 42 人の外国人介護労働者、仲介業者、雇用主、その他の関係者などの半構造化インタビューおよび参与観察を中心に、「強き雇用主・悪き仲介業者・弱き外国人労働者」といういびつな關係を作り出してきた制度を分析し、今日の問題点を考察した。

本論は一見、労働者にとっての不利な制度は、実際、雇用主と仲介業者にとっても良い制度ではなく、雇用主・仲介業者・労働者の 3 者はともに「制度的弱者」であることを指摘した。雇用主と仲介業者の「制度的弱者」という側面が見えにくく、いびつな関係が表面化してきたのは、外国人介護労働市場において長らく台湾が買い手市場にあったことが強く関係する。近年、高齢化の進行とともに、労働市場が買い手市場から売り手市場に大きく変化している中、雇用主と仲介業者の弱者的な立場が顕在化し、雇用主・仲介業者・労働者の 3 者間の複合的な関係がより複雑化し、3 者はともにより弱い立場に追い込まれて「総弱者化」しまう事態も生じている。

市場環境と法的環境が変化している中、外国人女性たちは一部の選択の可能性を得て、労働や生活の不安や不満で職場の変更を申し出るという能動的な行動に出ることが増えている。しかし、職場の移動の最終決定権が雇用主側にあるので、女性たちは自身の能動的な行動の結果に対して常に不安を感じている。その不安または結果への不満で、失踪者として働く選択をする女性が増えている。

一方、雇用主は介護労働力確保と管理責任の不安から、外国人女性を厳しく管理することが多いが、失踪者の発生で緊急的な介護労働力を確保するため、別の失踪者をより高い賃金で雇うケースが増加している。また、台湾の仲介業者も細る労働力と利益の確保のため、失踪者を雇用主に紹介することが少なくない。本来、合法的な雇用・仲介・就労が一番安心であるが、制度上の問題で雇用主・仲介業者・労働者の 3 者はともに非合法の形を選択してしまう現象が起きている。「厳格な管理」が維持されている中、市場環境や法的環境が変化しても、労働者の状況が改善されておらず、雇用主および仲介業者はこれまで得ていた利得を得られなくなり、雇用主は介護労働力の確保に不安を感じ、仲介業者は「厳格な管理」と「人権的配慮」の矛盾の中、労働者

確保と利益確保で苦しむようになっている。

後輩への助言

学位取得が確定した今、博士論文の作成は自分と戦い続けるマラソンのようなものと思える。ゴールへの期待と焦り、走る喜びと不安、後悔したくない気持ちと楽になりたい気持ちを抱えて走り続けることである。数十キロ先のゴールを考えると弱気になりやすいので、「あの坂の向こうにある綺麗な景色が見えるまで走る」「少し休憩して栄養補給してからまた走る」「隣の人と声を掛け合いながら走る」と、覚悟を決めて、最後まで走り続けるノウハウを模索しながらゴールまで行く。

また、博士論文はオリジナリティーが求められているので、時間をかけて試行錯誤の中で自身が持っている問題意識を掘り下げて、自身のオリジナリティーを模索する必要がある。フィールドワークを中心に研究を進めてきた私は、こうした作業は頭で冷静に考え、分析するだけではなく、心も体も使わなければならないと思う。

まず、心の中の「なぜ」を体力と気力で収集した先行研究で整理し、頭でよく考えてまとめる。そして、理解できるところと理解できないところをまた体力と気力を掛けてフィールドワークで実証したり答えを探したり、さらに新たな「なぜ」を発見し、その答えを発掘していく。フィールドワークで 100 人近くの人と接してきたが、いい意味で心も沢山使わなければならなかった。相手に自分のことに対して関心を持ってもらい、信頼してもらえるためにどうすれば良いのか。相手にとっても良い時間や相互的なシェアになるにはどうすれば良いのか。相手と意見が相違する場合には、自身の考えを正直に伝えられながらも気持ちの良い対話が続けられるようにするにはどうすれば良いのか。

そして、フィールドワークなどで感じた痛みや挫折、または喜びや充実感も論文の内容になるように、どのように消化すれば良いのか。最終的に心と頭、体力と気力を全部駆使し、論文を書き上げなければならない。書き上げたものが批判される痛みをも耐えて改善し、自身の主張を正々堂々と述べられるようにしなければならない。ここもやはり頭だけではなく、心と体をフルに必要がある。博士論文はある問いに対して、独自の答えを見出すことである。その答えは、論理的に説明する必要だけではなく、自身の心に正直に、最善を尽くしたものでなければならないと私は思う。

（国際学研究科　国際学専攻　第 10 期生）

（2019 年 3 月 19 日原稿受理）

博士録 49　2019 年度博士課程の新入生を紹介します。

① 氏名：スタニスラス アクア（*Stanilaus ACQUAH*）

② 出身大学院：ガーナ大学大学院

③ 専門：国際学

④ 指導教官または所属研究室：阪本公美子研究室
⑤ 趣味：音楽、絵画、鉛筆素描
⑥ 研究テーマ：TICAD を通した日本とアフリカの関係：中国や韓国との競争に起因するアフリカ開発への影響
⑦ 自己紹介：私の名前はスタニスラス アクア、36 歳でガーナ（西アフリカ）出身です。2009 年 11 月から 2018 年 9 月までガーナの日本大使館で広報・文化アシスタント（事務員）として勤務していました。私は日本語と日本の文化が大好きです。2022 年までに宇都宮大学大学院を修了して博士号を取得したいと考えています。ガーナ大学のアジア研究センターとレゴン国際研究センターで日本とアジアについて教えたいです。私は日本/アジア・アフリカ関係に貢献し、ガーナでも日本語を教えていきたいと思っています。 ガーナ大学では政治学とフランス語を学び学士号を取得、大学院では国際関係の修士課程を修了しました。

（2019 年 4 月 22 日原稿受理）　（翻訳協力：仲田和正さん）

① 氏名：トン ヌー タン トゥ（*TON NU Thanh Tu*）
② 出身大学院：宇都宮大学大学院国際学研究科博士前期課程国際文化研究専攻
③ 専門：言語学
④ 指導教官または所属研究室：佐々木一隆研究室
⑤ 趣味：料理、DIY
⑥ 研究テーマ：文構造に着目した日本語とベトナム語における曖昧さの比較の解析

自己紹介：この春、国際学研究科国際学研究専攻に進学しましたトンヌータントゥです。ベトナムのホーチミン市の近くにあるニャチャン市から来ました。ニャチャン市はとても綺麗な海に面していてリゾートとして有名で、泳ぎが上手な人が多いですが、私は全然泳げません。

日本滞在は今年で５年目になります。宇都宮には三年前やって来ました。佐々木先生の研究室で研究生として１年間過ごし、その後進学して修士２年間宇都宮大学で研究を続けました。博士前期課程ではベトナム人学習者が何故日本語を曖昧と感じるのか、という点に興味を持ち研究しましたが、さらに研究を深めたいと思って博士課程に進学しました。

趣味は料理を作ったり、DIY をしたりすることです。後、お寿司や刺身など日本の料理が好きでよく夫と一緒に食べ歩いています。

日本生活には大分慣れてきましたが、日本の事についてまだ深く理解しているとは思えません。もっと日本の事を理解し、研究に活かせるようこれからの３年間、全力を尽くして頑張りたいと思います。

（国際学研究科 国際文化研究専攻 第 19 期生）

（2019 年 4 月 23 日原稿受理）

① 氏名：三浦 美恵子(*MIURA Mieko*)
② 出身大学院：英国エディンバラ大学大学院
③ 専門：在留外国人の医療・教育・就労
④ 指導教官または所属研究室：田巻 松雄教授
⑤ 趣味：料理、旅行、温泉
⑥ 研究テーマ：特別支援学級に在籍している外国ルーツの子どもたち
⑦ 自己紹介：この度の入学を大変嬉しく思っており、これからの日々が楽しみで仕方ありません。博士課程での学びを教育、研究、そして自分の生き方に反映していきたいです。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

（2019 年 4 月 9 日原稿受理）

知究人 35　第 9 号から特に、国際学部出身者で他大学院へ進学された方に、寄稿をお願いしたコーナー(ちきゅうびと)を設けました。

海外だより 28　第 27 号から国際学研究科、国際学部出身の海外在住者からの寄稿をお願いしたコーナーを設けました。

海外留学今昔 27　第 35 号から国際学部出身者および在学者を中心とした海外留学体験の寄稿をお願いしたコーナーを設けました。自薦・他薦を問いませんので、**海外留学経験者および海外留学中の在学者の積極的な情報提供**を事務局にお寄せ下さい。

「留学体験記」

大川 裕

“สวัสดีค่ะ” 日本でも、最近よく目にするようになったこの文字。みなさんは、これがどこの国の文字かわかりますか？どこの国か分からなくても、この文字を日本のどこかで見たことがある人は多くいると思います。正解は、タイ王国です！親日国で知られているのはもちろん、タイ料理を食べたり、旅行に行ったりして、タイに触れたことがある人は多くいるのではないでしょうか。今回は、そんなタイでの私の留学についてお話ししたいと思います。

私がタイに興味を持ったのは、タイ語がきっかけでした。宇都宮大学国際学部は、第二外国語の履修が必修となっています。そこで、私は、「せっかくだから、今まで触れたことがない言語を学んでみよう」と思い、タイ語を選択しました。新しい刺激を求め、飛び込んでみたはいいものの、初めはタイ語のアルファベットを覚えることにとても苦労しました。小学生が英語のアルファベットを習うのと同じように、一つ一つ一から学び始めます。しかし、段々と書けるようになってくると、タイ文字の可愛さやタイ語の柔らかい発

音に惹かれていく自分がいました。もっとタイ語を学びたい、タイ語が話されているタイという国を知りたい、その国で生きるタイ人を知りたいと思うようになり、留学を決めました。

「タイで生活がしてみたい」という気持ちだけで、タイに到着した初日。空港では、私が話す、声調も発音もバラバラなタイ語はもちろん全く通じず、さらには英語も通じませんでした。そんな不安から始まった留学でしたが、タイ語を学ぶのには最適な環境でした。

私は、バンコク郊外にあるカセサート大学人文学部タイ語学科に留学をしました。バンコク中心にある大学に比べ、木々や生き物が多く、自然に囲まれた大学です。大学では、基本タイ語の授業を受けていましたが、タイ語学科の先生方のご好意で、タイ文化を体験する機会をたくさん得ることができました。例えば、授業の合間に、先生が持参して来てくれた材料を使って、タイ料理作りに挑戦したり、あるイベントで披露するタイの伝統的なダンスを踊ったりなど、通常タイ語学科で学べる以上のことを学び、経験することができました。学校以外の生活では、何よりも安くて美味しいタイ料理に毎日幸せを感じていました。特に、私は、売り手と買い手が直接会話したり、顔を合わせたりできるタイの屋台文化が大好きでした。一年現地で生活していると、「いつもの店」ができ、そこに行くと「また来たね」と言わんばかりに笑顔で迎えてくれる屋台のおばさんのことを、いつも思い出します。日本とはまた違った「人の温かさ」を実感しました。

これまで述べてきた経験の全ては、実際にタイへいき、現地で過ごす時間を持てたからこそだと思っています。現地へ行き、そこで暮らす人と同じものを食べ、同じ生活スタイルで過ごし、日本にいるだけでは出会えないたくさんの人と出会えたからこそ、そこから得られた学びは自分自身にたくさんの刺激をくれました。これこそが留学の価値だと思います。

最後に、私の留学を支えてくださった多くの方々に感謝の気持ちを伝えたいと思います。本当にありがとうございました。

（国際学部　国際文化学科　第４年次在校生）

（2018 年 12 月 5 日原稿受理）

「タイ留学体験記」

玉城 恵

サワディーカ！タイ語で「こんにちは」という意味です。私の留学生活は、この言葉から始まりました。2017 年８月から約 10 か月間、タイのカセサート大学人文学部タイ語学科で多くのことを学びました。私がタイに留学をしたきっかけは、タイの子供の教育支援サークル「ナムチャイ」でタイを訪れたことです。初めてタイに行った時にタイ語を上手く話せなかった私に対して、現地の人は温かいおもてなしや美味しい手料理を作ってくれ

ました。これに心を打たれ、その時から私はタイの虜になりました。そこで、もっとタイ語の能力を高め現地の人と交流し、タイの生活や文化に触れたいと考え、タイ留学を決めました。

私はタイに行って経験した印象的だった２つのことについて皆さんに紹介したいと思います。まず一つ目は「出会い」です。最初は友達がいなかったため、どうにかして友達を作りたいと思い、カセサート大学の柔道サークルに入りました。タイ人のコミュニティーに飛び込むことで、最初は拙いタイ語だったのがメキメキと上達していき、言葉だけでなくローカルな情報を得るようになり、よりタイ人の生活に密着することができました。

また、タイ王国は東南アジアの中心にあり、多くの国と接しています。この地理的優位性からタイには、日本からだけではなく、東南アジア諸国から沢山の留学生が学びに来ます。私が彼らと出会ったのはクリサナ寮に住み始めてからです。クリサナ寮で出会った人々の出身国を挙げていくと、ラオスをはじめとしたカンボジア、ベトナム、ミャンマー、マレーシア、インドネシア、フィリピンといった東南アジア諸国や、中国、インド、ブータン、アフリカ、ヨーロッパ…世界各国から集まっています。彼らと共に過ごすことで、タイ仏教のブッタ誕生祭やムスリムのラマダーン、インドネシアの独立記念日、中国の旧正月などの宗教的イベントや、様々な国の食べ物を持ち寄り、互いの国の食文化に直に触れる事ができました。

２つ目はタイ人の性格についてです。よくタイ人が言う「マイペンライ」の言葉の裏には沢山の意味が隠れています。例えば、「気にしないで」、「どういたしまして」、「遠慮しないで」など、同じ言葉でも多くの状況で使う事ができ、タイではとても便利な言葉です。このマイペンライという言葉が、タイ人の大らかな性格や優しさを象徴しているように感じました。私はマイペンライという言葉が大好きで、マイペンライ精神で生きていこうと思いました。

今回の留学は私の人生の中で最も多くの人と出会い、最も自分の価値観や生活スタイルに影響を与えたものでした。心の底から留学する事ができて良かったと思っております。最後に、私の留学をサポートして下さった宇都宮大学、国際交流課の方々やカセサート大学の先生方、両親、友人達には深く感謝を申し上げます。

これからのカセサート大学と宇都宮大学の交流関係が益々活発になることを願っております。

（国際学部 国際文化学科 第４年次在校生）

（2019 年 2 月 5 日原稿受理）

学生サロン 16　知求会ニュース第 41 号より現役学部生によるコーナーを設けました。自薦・他薦を問いませんので、**現役学部生の積極的な情報提供**を事務局にお寄せ下さい。

「研究会設立を通して私が得たもの」

宇都宮大学国際平和と司法研究会（Utsunomiya International Peace and Justice）
2018 副代表　**横山友輝**

私は、2018 年春に新しく設立された「宇都宮大学国際平和と司法研究会」で副代表を務めていました、横山友輝です。この研究会では、顧問をしてくださっている藤井広重先生の下、代表の榊原彩加さん（現国際学部国際学科 2 年在学）を中心に、日々、各自の興味分野に基づいて勉強、研究を行ったり、外部から講師の方をお招きして講演会を開催したりしています。私は、新しい研究会の設立を通して様々な経験をして多くのことを学ぶことができました。

「宇都宮大学国際平和と司法研究会」は、宇都宮大学の学生が国際平和について、様々な視点から意見交換を行う場所を提供することを目的に設立され、現在は約 10 名が活動に参加しています。日々の活動では、先生に作っていただいた、国際平和に関する問いに取り組んだり、文献の読み合わせを行ったりしています。活動時には、ディスカッションの時間が設けられ、各々の意見を交換しています。初めの頃は、自分の意見をアウトプットすることが難しく、活発な意見交換とまではいきませんでした。しかし、最近は、少しずつ自分の意見を言葉にしてわかりやすく相手に伝える力や、国際平和に関する知識が身についてきて、非常に有意義なディスカッションができていると思います。昨年度の 12 月には、1 年間の活動のまとめとして、「『文民の保護』とは何か―コンゴ民主共和国と国連 PKO」と題して、公開シンポジウムを開催しました。準備が大変で、何度もくじけそうになりましたが、学内外から多くの方に集まっていただき、無事成功させることができ、本当に良い経験となりました。

また、本研究会では 2，3 か月に 1 度、宇都宮大学に来ている交換留学生や実務経験をお持ちの専門家の方から、現在世界で起きている様々な事象やキャリアパスについて講演をしていただいています。12 月に開催された公開シンポジウムの際には、内閣府国際平和協力本部事務局にお勤めの方に基調講演をしていただきました。普段、学内では聞くことのできない貴重なお話をしていただけるので、毎回の講演会が本当に楽しみです。

私たちの研究会では、以上のような活動を行っています。これらのとても貴重な活動を通したくさんの知識はもちろん、多くの人とかかわる機会をいただきました。中でも、目標はそれぞれ違いますが、一緒に学んでいくことができるかけがえのない友人たちに出会うことができたことは、私にとって何物にも代えがたい宝物です。最後に、私たちの活動を日々支えてくださっている本学関係者の皆様、いつも優しくご指導くださる藤井広重先生をはじめ、国際学部の先生方に感謝の意を表して研究会の紹介とさせていただきます。なお、本研究会についての詳しい活動内容・予定は公式ブログで共有していますので、どうぞご覧ください。

宇都宮大学国際平和と司法研究会公式ブログ：〈https://profile.ameba.jp/ameba/uipj〉

（国際学部　国際学科　第 3 年次在校生）

（2019 年 4 月 18 日原稿受理）

キャリア指南 13　現役学部生に向けた企画として、宇都宮大学全学部から国際機関をはじめ、NGO・NPO や企業などで活躍する先輩方に執筆していただくコーナーを設けました。自薦・他薦を問いませんので、**キャリア指南にふさわしい卒業生の積極的な情報提供**を事務局にお寄せ下さい。

フォーラム　2019 年の皐月を迎えて、皆様慌しいことと思います。（原稿集めに苦労しています。）

「少年よ、大志を抱け」雑感

舘野 治信

4 月初旬の数日間、私事で札幌に滞在した。空いた時間に、宿泊先に程近い北海道大学のキャンパスを散策した。北の地の春はまだ浅く、そこかしこに集積された高さ 2～3mの雪の小山が見られた。広大な敷地の一角にクラーク博士の胸像があり、ご覧になった方も多いと思います。銅像を見ながら、予てからの気がかりを思い出した。

“Boys, be ambitious”（「少年よ、大志を抱け」）、明治初期の若きエリートたちに向けた惜別の辞を、ずっと立身出世志向と理解し、現代社会には通じにくい言辞と思っていました。しかし、偶然立ち寄った北大キャンパス内の店の一隅に『クラーク博士小伝』なる小冊子を発見、一読し、永年の胸のつかえがおりました。

これによる“Boys, be ambitious”の真意を以下に紹介します。

MESSEAGE OF DR.CLARK 1

“Boys, be ambitious!” Be ambitious not for money or for selfish aggrandizement, not for that evanescent thing which men call fame.

Be ambitious for knowledge, for righteousness, and for the uplift of your people.

Be ambitious for attainment of all that a man ought to be.

これなら敬虔なキリスト教徒であったと伝えられる博士にふさわしい言葉のように思いました。奇しくも、本文執筆中の本 4 月 16 日は、1877 年のクラーク博士が札幌郊外で若者たちに別れを告げた日です。

“Boys, be ambitious”には諸説があるようです。その一つは、クラーク博士の言葉は、“Boys, be ambitious like this old man”であり、これは直接に教えを受けた札幌農学校の学生の言葉とのことです。さらには、クラーク博士の出身地ニューイングランド地方では、

別れの言葉として、「達者でな」との意で良く使われていたとの説もあります。いずれにしても、立身出世志向の言葉ではないようです。

日本の立身出世の一翼を担ってきた東京大学の入学式での、上野千鶴子さんの祝辞がマスコミでも取り上げられていたが、一部を紹介します。
「あなたたちのがんばりを、どうぞ自分が勝ち抜くためだけに使わないで下さい。恵まれた環境と恵まれた能力とを、恵まれないひとびとを貶めるためにではなく、そういうひとびとを助けるために使って下さい。」[2]
クラーク博士のメッセージに共通するものを感じるのは、筆者の牽強付会かも知れません。「知求会ニュース　第70号」が発刊される頃には、新元号に移行しているでしょうが、明治、大正、昭和、そして平成と伝えられたクラーク博士のメッセージが令和を生きる人たちにも届くことを祈念しています。

1『クラーク博士小伝』　2018年、NPO法人クラーク会
2 東京大学ホームページ http://www.u-tokyo.ac.jp

（国際学研究科 国際社会研究専攻　第11期修了生）
（2019年4月20日原稿受理）

●お願い―宇都宮大学３C基金への寄付に関して

4月に大学から「宇都宮大学３C基金」寄付への協力要請を受けています。詳細は以下のアドレスへアクセスしてください。http://www.utsunomiya-u.ac.jp/fund/3c_kikin.php
なお、海外からでも寄付ができる方法がありますので、よろしくお願いいたします。

2018(平成30)年4月1日から2019(平成31)年1月31日までの寄付状況は以下の通りです。国際学部　10件・教育学部　62件・工学部　53件・農学部　185件・不明　1件の311件です。このデータが示すように、国際学部同窓会・国際学研究科同窓会からの同窓生による関心が薄いように思われます。この機会に、ぜひご協力を重ねてお願いします。

お知らせ

2019年11月23日(土)の午前中に宇都宮大学創立70周年記念イベントと企画展「宇都宮大学の歴史」が開催されます。午後から第5回宇都宮大学ホームカミングデーが各学部で開催されます。ぜひ、多くの同窓生の参集をお待ちしています。本年の手帳に予定を入れておいてください。よろしくお願いします。

東南アジア支部だより

第63号から、タイ在住の大畑美優紀さん（国際学部社会学科第1期生・国際学研究科国際社会研究専攻第1期期生）が発起人となり、国際学部同窓会および大学院国際学研究科

同窓会の東南アジア支部としてニュースレターを創刊しました。2019 年 4 月から、年 4 回から年 2 回発行（4 月 1 日、9 月 1 日）の変更になりました。

EU 支部だより

第 38 号からイタリア在住の松原真実子さんによる知求会 EU 支部だより「Newsreel World」を発行してきました。今回の 30 号の内容は、1 イタリア　ベネチア、観光客に最大 1,200 円の「訪問税」導入へ　2 イタリア　ローマ市、歴史地区の「食べ歩き観光」禁止条例を施行　3　日本　金沢市で宿泊税開始　全国 4 例目の施行　4 EU 支部だより－ミラノ大学－です。配信方法は、画像が掲載されているために別便で配信します。ファイル容量が大きいことで、ニュースレターが受信できない場合にはその状況をお知らせください。

編集者のひとりごと

●**蔡佳樹**さん（2017 12 28 逝去）（享年 44 歳）、**金英花**さん（2019 02 28 逝去）（享年 46 歳）の博士号取得者を当会は相次いで失いました。金さんからのメールを振り返ってみたら、2018 年 4 月 1 日に、「蔡佳樹さん、博士後期 3 期生のご逝去のことですが、あまりにも突然すぎて本当に驚いています。何が原因かご存知でしょうか。」「実際の交流はなかったとしても、顔見知りで、同年代で本当に無念でなりません。」という問い合わせに、編集者が回答していました。本年の博士課程オリエンテーションでは、学位取得も大事ですが、先輩方の訃報もあったので健康には十分注意をしてくださいとお願いしました。どうぞ、会員の皆様、読者の皆様も健康であることが日々の生きざまにつながることを忘れずにおいてください。そして、新しい「令和」の時代を迎え、皆様それぞれが過去を忘れずに、過去を活かして未来を切り開いていくことを祈念しています。

●宇都宮大学で仕事をしている同窓生が多くなりました。編集者が知る限りでは、平井雅世さん（国際社会研究専攻 4 期生）・坂本文子さん（国際社会研究専攻 5 期生）・宮原崇晃さん（国際文化研究専攻 10 期生）・鄭安君さん（国際学研究専攻 10 期生）・金多希さん（国際学研究専攻 2 期生）・趙敏さん（国際学研究専攻 4 期生）らがいます。事務職、非常勤講師などで大学運営を支えています。大いに力を発揮していただければと思います。もし、他にも同窓生がいましたら、事務局へご一報ください。

編集後記：2010 年 4 月 26 日から 知求会ニュースのバックナンバーは **国際学部同窓会 HP**（http://www.afis.jp）で見られるようになっています。

同窓会会員の皆様へのお願い：住所、勤務先および携帯電話番号、メールアドレスの変更の際は事務局へメールして下さい。chikyukai@freeml.com

---